

谷川 俊太郎

母のぼけ

この世の人が死にました
一人の人が死にました
大地が喜んで
空も喜んで

ほほえんでうたっている (インディオ 死者の唄)
大都会の中のひとり暮らしの老人が、このような死をむかえることができるとは思わないし、ほとんど機械的とさえ言える延命を目的とする現代医療にたずさわる人たちに、このようなくうたは自身の信念への冒瀆とも思えるだろう。しかし、私たちが直面している老いと死の問題が、私たちの死を含めた人生観、世界観の変革を迫っていることは認めざるをえないだろう。
「ん」まであるく 草思社より



伊藤 比呂美

父の看取り

老い方も、死に方も描けない時代

親を見ていて感じたのは、どうもかれらは死に方がわかっていない。死にたくないけど、生きたいとも思っていない。戦争で負けて、高度成長にもまれた親たちは、仏壇も神棚も持たず、自然をありがたがることも忘れ、信じるものは何もなく、かといって西洋の知識人のような確固たる自己も持っていない。宙ぶらりんになって死ぬにしない。死ぬための心構えも持っていない。

先生！どうやって死んだらいいですか？

文芸春秋より

どう老いて、どう死ぬか。それが問題だ。

死生観

- 宅老所よりあい
- ふたりの詩人

ぼけと看取り

宅老所よりあいは「ぼけの世界」と「看取り」に24年間付き合ってきました。本来、高齢期のぼけも看取りも常識（生活者）の世界にありました。しかし、今は医療（専門職）の世界にあります。

老いの深まりと共にある機能の低下と不全。その、どこまでを医療やリハビリで克服し、どこからを受け入れるのか。私たちの社会は、見当をつけられず右往左往しているのではないのでしょうか。

ふたりの詩人

谷川 俊太郎さん、伊藤 比呂美さん、ふたりの詩人をお招きしてセミナーを行います。谷川さんはお母さんのぼけの世界に、伊藤さんはお父さんの看取りに付き合われました。体験談から生まれる肉声とそこから考えた老い方、死に方をうかがいたいと思います。この機会にみなさんと共に考えたいと思います。

申し込み

チケットの事前購入が必要です。
郵便振込にて申込みを受け付けます。

郵便振替口座 01780-3-13761
加入者名 宅老所よりあい

通信欄に以下の項目をご記入ください。

- ① セミナー参加
- ② 氏名
- ③ 郵便番号
- ④ 住所
- ⑤ 連絡先 (TEL)
- ⑥ 参加人数
- ⑦ セミナー参加費 (2000円×参加人数)

● 上記口座に振り込みが確認されたのち、チケットを郵送いたします。

● 申込み締め切りは、10月18日（土）までとなっております。
(定員になり次第、締め切らせていただきます。)

● 締め切り以降の申し込みは宅老所よりあいまでお電話にてお問い合わせください。

● 各よりあいにおいてもチケットの販売を行っております。